

IBM IT VISION 2

～IT全体最適化による経営への貢献～



2008年5月28日(水)、東京・恵比寿、ウェスティンホテル東京にて、『IBM IT VISION 2』が開催されました。

今回は IT 全体最適化による経営への貢献をテーマに、基調講演と六つのセッションが行われましたが、これらを通して「次世代エンタープライズ・データセンター」を実現するための三つのステップ、すなわち、「簡素化」、「共有化」、「ダイナミック」が明確に見えてきました。

六つのセッションでは、それぞれ仮想化・統合、エネルギー効率化、事業継続、サービス管理という、四つの切り口から「次世代エンタープライズ・データセンター」実現のためのアプローチを解説、またグローバル展開されているお客様における全社規模の最適化など、先進的なお客様事例 3 件も紹介されました。

今回はこの講演の様様をご紹介します。

※ 当日のスピーカーはすべて日本アイ・ビー・エム株式会社所属のため、本文では会社名を省略しています。

三つのステップ、四つの切り口で

「次世代エンタープライズ・データセンター」をとらえる



井上 日登志

プログラムのスタートは基調講演から。STG 事業 エンタープライズ・システムズ 理事 井上 日登志が登壇し、この日行われる六つのセッションについてのダイジェストともいえる内容と、日本 IBM の「次世代エンタープライズ・データセンター」への具体的な取り組み分野とステップが提示されました。

まず、現在、変革が求められながらそれにこたえることができない企業の IT 基盤が抱える課題と、実際に求められている次世代の IT 基盤のギャップを紹介。本来、企業目標を達成させるためにあるべき IT 基盤が、むしろ企業の成長や事業継続においてリスク要因になっているのではないか? という、まさに本末転倒な現在の状況が



見えてきます。その上で「従来のITシステムからITサービスへの変革が求められている」とし、それこそが「次世代エンタープライズ・データセンター」によって実現されることであると、井上は力強く語ります。

続いてその実現のためのステップを①「簡素化」、②「共有化」、そして最後に③「ダイナミック」であると説き、それぞれのフェーズにおける目標、作業内容を提示。簡素化では経済効果の追求、共有化では変化への迅速な対応、ダイナミックは経営とITの一体化がテーマであることも紹介されました。この三つのステップは、以後六つのセッションにおいても繰り返し紹介され、「次世代エンタープライズ・データセンター」実現のための重要なトピックであることが参加者の耳に刻まれていきます。

ではこれらを実現し、支えるためのIBM Systemsの強みとは何か？井上の講演は、IBMが提供できる拡張性や柔軟性、長年の経験を生かしたサーバー製品の優位性、40年に及ぶ仮想化へのリーダーシップについて紹介。概念と現実、その二つをきちんと提唱できるのが強みであること。また、それなくしては「次世代エンタープライズ・データセンター」の実現は困難であるとし、その実現のためにIBMは、IT全体最適化に向けた取り組みを通じ、変化し続けるビジネス環境を支援することを宣言し、講演を終えました。

今後5年以内にすべてのデータセンターは見直しの必要性に直面する



関 孝則

ここからは四つの切り口による具体的なセッションがスタート。まず『仮想化・統合セッション』では、テクニカル・セールス・サポート システム製品テクニカル・セールス 技術理事 関 孝則が、「多くのお客様で検討・導入が増えてきたデータセンターの仮想化への取り組みは、簡素化の第一歩であり、IT基盤に対する新

たなコスト基準を提供することでもある」と説明。仮想化を単純な統合の手段にとどめるのではなく、さらにその可能性を広げていくことで、一歩進んだ柔軟なITサービスの実現が図れることを、ソリューション事例を交えながら紹介しました。「今後5年以内にすべてのデータセンターは見直しの必要性に直面します。現在、IT基盤がビジネスの制約になっていないでしょうか。なっているなら一緒に改革を進めていきましょう」というメッセージが印象に残ります。



濱田 正彦

これを受けて、既に仮想化の取り組みを進めている先進企業事例を、HVSC デザイン・センター担当 システムズ&テクノロジー・エバンジェリスト 濱田 正彦が紹介し、午前の部が終了しました。

企業リスクの要因となるIT基盤 そのために取り組まなければならないこと



小池 裕幸

「次世代エンタープライズ・データセンター」の四つの切り口の二つ目、エネルギー効率化のための取り組みから午後のセッションは始まります。

登壇したのは、ITS 事業部 インフラストラクチャー・ソリューション担当 事業部長 小池 裕幸。グリーンを取り巻く環境の変化、IBMの地球温暖化に対する取り組み、そしてエネルギー効率化を支援するソリューションという三つのトピックから、「次世代エンタープライズ・データセンター」と環境対策の関係をひもときます。温暖化に対する社会的要請や法規制に対してIT基盤もこたえていかなければ企業としてのリスク要因になってしまうこと、そのリスクは切迫していることが語られ、しっかりした戦略のもとで取り組まなければいけないとメッセージを送ります。この取り組みは当然、一気にすべてが解決するというものではなく、実は小さいことの積み重ねです。サーバー・ルームのクール



カーテンの取り付け方という実に細かい創意工夫も大きな実績につながるという話も披露されました。参加者の方々にとっては、壮大に思える「次世代エンタープライズ・データセンター」の取り組みも実は日常業務の延長線上にあることが認識され、より身近に感じられたのではないのでしょうか。



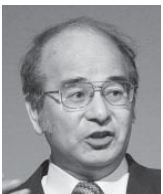
高田 新

四つの切り口、3番目は事業継続。システム製品テクニカル・セールス エグゼクティブ IT スペシャリスト システムズ&テクノロジー・エバンジェリスト 高田 新が担当しました。近年、主要な格付け会社の企業格付けにも組み込まれるなど、事業継続対策が注目されている四つの背景から、その中でも IT 環境がいかに重要であるかを説き、具体的な事業継続のためのロードマップを提示、今から始めるべき取り組み内容について紹介しました。例えば最初の簡素化のステップでは「災害時や障害時のシステムの確実な切り替えを可能にする」、共有化のステップでは「企業レベルの統一された災害・復旧対策、異機種混合データ環境での災害・障害復旧に対する統一されたコントロール」、そしてダイナミックのステップでは、「クラウド/サービス指向環境の中での統一されたコントロール」が「次世代エンタープライズ・データセンター」を事業継続の面からみた場合の到達点であることが提示されました。

四つの切り口の最後となるのはサービス管理。SW 事業 Tivoli® 事業部 サービス管理担当部長 久納 信之が、自ら体験した阪神淡路大震災のときのサービス管理についてのエピソードを交えながら、ビジネス視点、急速な変化に勝ち残る経営者の視点から、IT サービスを管理するための手法にフォーカスしたセッションを行いました。



久納 信之



中島 丈夫

そして、最後にこの日の総括的な内容であり、また IBM だからこそできる先進テクノロジーから考える「次世代エンタープライズ・データセンター」というテーマで、エグゼクティブ・テクニカル・アドバイザー 技術理事 中島 丈夫が講演。「中島節」といってもよいほど熱く、しかし親近感のあるスピーチで、この日最後まで真剣なまなざしでセッションに参加していた方々の関心をひきつけました。

「次世代」ではあるが 取り組みは今すぐ始められる

「次世代エンタープライズ・データセンター」のステップである簡素化、共有化、ダイナミックに実際の取り組みを当てはめると、具体的な取り組みが見えやすくなるのが、この日のプログラムからわかります。例えば仮想化・統合の切り口ならば、簡素化は仮想化、共有化はアンサンブル（共有資源プール）、ダイナミックはクラウド・コンピューティングの活用。エネルギー効率化なら、簡素化では電力監視、共有化では IT やデータセンターの資産管理、ダイナミックではワークロードと電力の最適化。事業継続という切り口ならば、簡素化はバックアップ・回復レベル、共有化は分離・インテグリティ・ID 管理まで進み、ダイナミックでは、継続的なデータ保護と自動アーカイブというように、概念ではなく実際の身近な取り組みの積み重ねから生まれる進化によって「次世代エンタープライズ・データセンター」が実現していくのです。

そして共通していたのは、「今から始められる」ということ。参加された方もその思いを持ってそれぞれの企業へと帰られたことでしょう。

